

第9章 菩提心を^{しょうじゆ}授受する Cultivation of Bodhicitta

II 発心の[自]体 Essence

III 発心の区別 Classification

IV 発心の所縁 Objectives

V 発心の因 Cause

VI 発心を受ける対境 From Whom You Receive It

VII 菩提心を受ける儀軌 Method(Ceremony)

A 1) 聖者マンジュシュリーから軌範師ナーガールジュナに伝承されてきた軌範師シャーンティデーヴァの流儀と、

B 2) 聖者マイトレーヤから軌範師アサンガに伝承されてきた主尊セルリンパの流儀 Dharmakirti

との[合計]二つとして知るべきです。

本日の担当箇所です

(p164 19行目~p167 4行目)

A 軌範師シャーンティデーヴァの流儀により菩提心を受ける儀軌 Shantideva

1.1) 加行の儀軌 the preparation

1) 供養を捧げること

2) 罪を懺悔すること

懺悔の仕方

3) 善に随喜すること

4) 法輪を転ずるよう勧請すること

5) 涅槃をしないよう祈願すること

6) 善根を廻向すること

2.2) 本行の儀軌 the actual ceremony

3.3) 後の儀軌 the conclusion

〈復習〉

菩提心を受ける儀軌には異なった多くの方法が見られますが、タルゲンでは

1) シャーンティデーヴァの流儀と

2) セルリンパの流儀

で説明しています。

参考資料『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ/西村香訳註 チベット仏教普及協会 p36

第一章 菩提心の利益 【解説】より

菩提心をおこすための方法には、主に二つあります。一つはアティーシャが伝えた「**因果の七秘訣**」。もう一つはシャーンティデーヴァが『入菩薩行論』に説いた「**自他の交換**」です。

参考資料『ダライ・ラマの仏教哲学講義』ダライ・ラマ 14世デンジン・ギャツォ著 福田洋一訳 大東出版社 p175

このような利他的精神をもって、どのようにして修行して行くか、それには二つの方法があります。一つはマイトレーヤ(弥勒)からアサンガ(無着)へと伝承されてきた修行法、すなわち「**七つの因果に関する教誡**」です。もう一つはマンジュシュリー(文殊)からナーガールジュナ(龍樹)とシャーンティデーヴァ(寂天)に伝わった修行法、すなわち「**自他を平等に見なす瞑想法**」です。

本文：軌範師シャーンティデーヴァの流儀により菩提心を受ける儀軌

それもまた、聖者マンジュシュリーから軌範師ナーガールジュナに伝承されてきた軌範師シャーンティデーヴァの流儀のようならば、三つ

- 1) 加行^{けぎょう}の儀軌^{ぎぎ}と、
- 2) 本行の儀軌と、
- 3) 後の儀軌です。

A.Shantideva.In Shantideva's tradition,which comes from Nagarjuna and was founded by Arya Manjushri,there are three topics:

- 1.the preparation,
- 2.the actual ceremony,and
- 3.the conclusion.

軌範師	弟子の規範となって、その行為を正す師。阿闍梨。
加行	一般に、正規の修行に対する準備的に行う行のこと。
本行	仏の悟りをうるために修する本来きままっている修行。
儀軌	規則、儀範、儀法などの意。

■『入菩薩行論』の構成について

◎赤字部分が本日の担当箇所^①に該当します。

参考資料『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ/西村香訳註 チベット仏教普及協会 p16

『入菩薩行論』の構成

ここで、シャーンティデーヴァの『入菩薩行論』をいっしょに学んでいくために、まずは『入菩薩行論』の全体を概説しておきましょう。(中略)

シャーンティデーヴァは、心髄として、菩提心の利益と二つの菩提心をおこす行について学ぶ方法を説いています。

第一章では、菩提心の素晴らしさ、すなわち罪を捨て、善を成就するための菩提心の利益を詳しく説かれます。

(中略) 第一章は「菩提心の利益」の章と呼ばれています。

第二章では、堅固な菩提心をおこすためには、菩提心の儀軌により、行としては七支分の行をすべきだとシャーンティデーヴァは説いており、七支分の前半部分である、礼拝、帰依、供養をし、そして四つの力をそなえた懺悔と、修行の妨げをなくすことについて述べています。この章は一般に「罪の懺悔」の章と呼ばれています。

第三章では、菩薩戒を持することと、七支分の後半部分である随喜、勧請、祈願、廻向が説かれています。

(中略) 第三章は「菩提心の受持」の章と言われます。

以降は、

第四章「菩提心の不放逸」の章、第五章「正知の守護」の章、第六章「忍辱波羅蜜」の章、第七章「精進波羅蜜」の章、第八章「禅定波羅蜜」の章、第九章「智慧波羅蜜」の章、第十章「廻向」となります。

■ 『入菩薩行論』は十章から成り立っていますが、それは三つのカテゴリーに分けることができます。

参考資料『ダライ・ラマ〈心〉の修行』ダライ・ラマ 14世デンジン・ギャツォ著 マリア・リンチェン訳 春秋社 p165

『入菩薩行論』について

(前略)

今私たちが勉強する『入菩薩行論』は、十章から成り立っています。

この教えは、まだ芽生えていない菩提心を育むための教え、育まれた菩提心がなくならないように維持するための教え、育んだ菩提心をますます高めていくための教え、という三つのカテゴリーに分けることができます。

第一章の「菩提心のもたらす利点」、第二章の「告白・懺悔」、第三章の「菩提心の生起」は、今まで持っていなかった菩提心を生起させるための教えです。

そして、第四章の「注意深さ」、第五章の「監視作用」、第六章の「忍耐」は、育まれた菩提心が失われないように維持するための教えとなっています。

さらに、第七章の「精進」、第八章の「禅定」、第九章の「智慧」は、育まれた菩提心に磨きをかけ、ますます高めていくための教えです。そして第十章は「廻向」となっています。

このように、ただ菩提心を起こすだけでなく、精進の力でそれをますます高め、増やしていくことによって、さとりという大いなる結果に一步ずつ近づいていくことができるわけです。

参考資料『ダライ・ラマ 至高なる道』ダライ・ラマ 14世デンジン・ギャツォ著 谷口富士夫訳 春秋社

p30

『入菩薩行論』全十章のうち第一章は、菩提心の特徴が主題です。**菩提心の準備として、功徳を積んで自分を浄化するために、七部門（七支）を実践する必要があります。**これが第二章の主題です。そして第三章は菩提心の起こし方を説いています。

p36

仏法の伝統によれば、心の訓練は段階を踏んで進めていかなければなりません。まず、最大の過失を取り除くことによって自分自身を浄化します。そして、すでにもっている数少ない徳を大きくすることによって、美徳を育てます。ナーガールジュナの一番弟子であるアーリヤデーヴァがおっしゃっています。

最初に悪を取り除け。

次に自己を取り除け。

最後に思いを取り除け。

これを知っている者こそ賢者である。

これが賢者の歩まなければならない道です。

心の訓練は段階を踏んで進めていく必要があります。まずは菩提心の準備（加行）として、功徳を積んで自分自身を浄化するために、七支分の行を実践します。

本文：加行の儀軌

第一〔：加行の儀軌〕には、六つ（訳註 29）

- 1) 供養を捧げることと、
- 2) 罪を懺悔することと、
- 3) 善に随喜することと、
- 4) 法輪を転ずるよう勧請することと、
- 5) 涅槃をしないよう祈願することと、
- 6) 善根を廻向することです。

The first topic has six subdivisions: making offerings, purifying nonvirtues, rejoicing in virtues, asking that the Wheel of Dharma be turned, beseeching not to take parinirvana, and dedicating the root of virtue.

※六つ（訳註 29）について

註 29) 「普賢行願讚」などの七支供養のうち、ここでは受戒の師に会う前なので、第一支の礼拝（帰命）が除かれたものとなっている。

参考資料『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ/西村香訳註 チベット仏教普及協会 p46

第二章【解説】より

資糧を積むことや罪障を浄化することは重要です。そして、それをまとめた最も重要な修行は「七支分」です。

七支分は、礼拝、供養、懺悔、随喜、勧請、祈願、廻向からなります。七支分における集会樹（ツォクシン）の観想は、福田である上師、仏、菩薩を対象に功德を積み、罪障を浄化する偉大なる瞑想修行であり、とても重要なものです。

功德を積むことと罪障を浄化すること、この二つは、顕教、密教すべてにおける重要な成就法にはほとんど必ず含まれます。『入菩薩行論』第二章においては、菩提心をおこして修行をおこなう、その前行の支分として、礼拝や供養、帰依をして、四つの力を揃えて修行の妨げとなる悪い条件である罪を懺悔し、善に対して随喜するなどの良い条件の功德を積むことをまず説いています。そして、その後、第三章のテーマでもある「菩提心の受持」を説いていきます。第二、三章では七支分について具体的に説いています。

※「普賢行願讚」について

参考資料『死を超える力』石川美恵著 太陽出版 より

『普賢行願讚』は『華嚴経』「入法界品」の中に出てくる普賢菩薩の偈文（詩）のことです。

参考資料『実践・チベット仏教入門』クンチョック・シタル ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 斎藤保高著 春秋社 p58

「七支分」とは、(1) 礼拝、(2) 供養、(3) 懺悔、(4) 随喜、(5) 勧請、(6) 祈願、(7) 廻向という七つの修行です。その典拠は、『華嚴経』の入法界品に求められます。

『入法界品』（にゅうほっかいぼん）とは、大乘仏教経典『華嚴経』の末尾に収録されている大部の経典（品）。サンスクリットの原題は『ガンダヴィユーハ・スートラ』（梵：Gandavyūha Sūtra）。

スダナ少年[1]（スダナ・クマーラ、善財童子）が、文殊菩薩に促されて悟りを求める旅に出発、53人の善知識（仏道の仲間・師）を訪ねて回り、最後に普賢菩薩の元で悟りを得る様が描かれる。 出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

ミラレーパの道歌より p91～

清浄祈願によりて導かれ

祈願文の中には、菩薩の修道の段位について説くものがたくさんありますので、読んでみられると良いでしょう。（中略）

どの祈願文もとても大切ですが、特別に大切なものが三つあります。ひとつは『普賢菩薩行願讚』、次にシャーンティデーヴァの『入菩薩行論』、そして『弥勒の誓願』です。これら三つの祈願文はどの派でもとても尊ばれており、祈願大法会などでも唱えられます。ですから他の修行が一切できなくても、これらの祈願文を読んで意味を理解すれば、それこそたった一行でもその意味を理解すれば、その利益は測り知れず、とても意味のあることなのです。（後略）

■（別添参考資料）「普賢行願讚」

参考資料『死を超える力』石川美恵著 太陽出版 より

偈番号（1）～（12）が「七支分」といわれる修行で、①礼拝（五体投地）②供養（花、香、灯明などを捧げる）③懺悔（みずからのおこないを反省する）④随喜（人の善いおこないを喜ぶ）⑤勸請（教えを説いて下さることを主尊に請う）⑥祈願（師匠などに、衆生利益のため現世にとどまることを願う）⑦回向（①～⑥によって生じた善をほかの人や生きものにもふりむけ、みなが悟りを得るように願う）が説かれている。ことに（12）は、（11）までを受けた「回向」に相当する。（13）～（41）が普賢菩薩の誓願で、（中略）（42）（43）を見ると、普賢菩薩のように願を立て行いたいと願う者の宣言（中略）（44）は文殊菩薩の誓願を成し遂げたいと願うもの（中略）（45）～（48）で、誓願の功德は最上の供養よりも勝ることが説かれる。（49）以下は阿弥陀如来の讚歌となり、普賢菩薩の行願を成就することは文殊菩薩の行願を成就することに等しく、それこそが阿弥陀の浄土へつながる修行であることが説かれ、阿弥陀信仰と普賢菩薩信仰が、文殊菩薩を介して『華嚴経』「入法界品」の中で絶妙に結び合っていく。（63）は、サンスクリット原文にはないチベット訳の付加で、回向文に相当しよう。

本文：供養を捧げる

そのうち、第一、供養を捧げることもまた、

- 1) **対境**と
- 2) 供養との二つと知るべきです。

a) Making Offerings. First, making offerings involves two elements: the object to whom you are making offerings and the offerings themselves.

対境 = 対象

本文：対境

それもまた、[第一:]対境は、**現前に住される[三]宝に対して供養することと、現前に住されないものに対して供養することとの二つは、福德が等しいと説明されているので、現前になっているものと、なっていないものとのすべてを対境にして、供養するのです。**

そのようにまた『莊嚴經論』に、「きわめて浄信する心をもったことにより、二つの資糧を完成させんがために、諸仏に対して衣などにより現前と非現前に供養します。」と説かれています。

(1) Object. There are two ways of making offerings: with the clear presence of the Triple Gem and without. Whether present or not, the offerings bring equal merit. Therefore, one should make offerings whether The Triple Gem is present or not. The *Ornament of Mahayana Sutra* says:

In order to perfect the two accumulations, make offerings of clothes to the Buddhas with a clear mind, whether in their presence or not.

- 現前** 目の前にあること。いま持っていること。いま現にいる。の意。現前供養の略
- 現前供養** 三宝に供養する十種の供養の一つ。現においでになる仏、または塔に対して食物や衣服などをさしあげること。⇔不現前供養
- 不現前供養** 目の前に供養する対象がないまま、仏像などの供養をすること。また、そのような供養。十種供養の一つ。

本文：供養

[第二:]供養にもまた、二つ[。そ]のうち、

- 1) **有上**の供養と、
- 2) **無上**の供養です。

(2) Offerings Themselves. There are two types of offerings: surpassable and unsurpassable.

- 有上** まだそれ以上のものがある。劣ったもののこと。⇔無上
- 無上** この上もないこと。最も優れていること。

本文：有上の供養

第一[：有上の供養]にも二つ、[すなわち]

- 1)財物の供養と、
- 2)修行の供養です。

第一[：財物の供養]は、礼拝の供養と、賞讃の供養と、物品を次第に準備した供養と、所有者が保有していない**究竟**の物の供養と、知により**化作**した供養と、身体を捧げる供養です。それらを広汎に知るべきです。

[第二:]修行の供養は、本尊の身体、**大印契を修習すること** 訳註 33 と、諸菩薩の**等持**（三昧）から生じた**莊嚴**により供養することです。

The first has two categories:the offering of material wealth and meditation practice.

The first [material wealth]is comprised of prostration,praise,materials of wealth laid out in the proper order,materials which are not owned by anyone,and offerings manifested by the mind and the body.These should be understood in detail.Offering of meditation practice refers to meditation on the deity's body (Skt.deva-kaya-mahamudra) and manifestation of offerings by the power of the bodhisattva's meditative concentration.

究竟	最上であること。究極であること。また、そのもの。
化作	神通力によってなかったものを作り出すこと。菩薩などが世の人を救うために、仮に姿を変えて現れたり、または種々の事物を現わしたり変えたりすること。
等持	心の平等で安定し、一つの対象に向かって集中すること。三昧とも。
莊嚴	仏が智慧や福德をもって、その身や国土を飾ること。浄土や仏堂の飾りつけ。また、その設備の美しく厳かなさま。

※大印契を修習すること 訳註 33 について

註 33) ガムボパは「大印契」を空性やその証悟という意味でも用いている。ここでは、それを押さえた上で、楽空無差別の修習ということであろう。顕教の大印契は、心の[自]体の上に一境性に安定させる無分別を修習して、安住を成就したことであり、これは波羅蜜乗の空性の証悟と等しい。秘密真言の大印契は、風が中央尿管に入る・住する・溶けるという三つを為したことから生じた大楽の光明をいい、無上瑜伽タントラすべての心髄中の心髄である。

(※波羅蜜乗＝顕教、証悟＝仏道を修行して身をもって悟ること)

→タルゲンの本文中の「大印契を修習すること」は、顕教において空性を悟ることの意味

第一：財物の供養は、**礼拝の供養**と、**賞賛の供養**と、**適切な順序で配置された財物の供養**と、**自分の持ちものでない最上の物の供養**と、**心で観想する供養**と、**からだの供養**です。これらを詳細に理解する必要があります。

第二：**修行の供養**は、本尊の身体を観想すること（**空性を修習すること**）と、**諸菩薩の三昧の力による供物の顕現により供養すること**です。

参考資料『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ/西村香訳註 チベット仏教普及協会 p47

■供養について

1.自分のもっているものを供養すること（第二章・1）

菩提心をおこすことや空性を理解する智慧は、原因も条件もなく自分の心に生じることはあり得ません。必ず原因と条件が揃わなければなりません。福德を積む行為はたくさんありますが、それらすべての中でも最上なのは供養です。**純粹で清浄な供養**によって、心相続が純粹になります。純粹な心がその心相続に尊い菩提心を持てるように、供養の修行をします。「純粹な対象」である**仏法と聖者**である僧（菩提心を持つ方がた）に対して、「純粹なもの」、すなわち質が良く清潔であるなどの良いものを**美しく配置**して、供養します。供物は、誤った手段や生活、罪から手に入れたものであってはなりません。

2.自分の持ちものでないものの供養

十方の世間で必要なものすべて、自分が見たもの、聞いたもの、すべてを供養します。それらの形や姿を心に観想し、それらを供養しようと考えて、**心で観想によって供養**します。出世间（十地の第八、九地）や浄土世界のもの、天、龍、人間などのあらゆる**虚空**のごとき世界を観想し、供養します。蓮華、唵鉢羅などの花、種子、葉、浄水、如意宝珠などの宝、山や木、林、世間にある供養すべきものを心で受けとって、自分のもののように考えて、物惜しみの気持ちを離れ、釈尊や弟子である菩薩たちに供養します。聖なる方がたは偉大な慈悲で、その供養を受けとってください。（第二章・2～7）。

3.からだの供養

「私は今、あらゆる生において大事にしてきた、**このからだを供養**します。どうぞ受けとってください。私はあなたの民となり、あなたの教えのとおりになります。」と誓い、供養します。（第二章・8）

4.心で観想する供養

観想において、仏や菩薩のお顔やおからだを洗い、清潔なタオルでおからだを拭くという供養をします。また、三世（現在、過去、未来）の世界の五感の対象である、かたち、音、におい、味、感触を仏、菩薩に尊敬とともにさしあげて、心に喜びの念をおこします。そして、それらの供養によって自他のすべての苦しみが除かれ、自他ともに喜びや幸せに満足すると観想し、供養します。心で観想する供養には、さまざまな方法があります。自分が考えられるかぎりの三世の広がりをお観想すべきです（第二章・10～21）

5.無上なる供養

「**文殊や普賢などの菩薩たちがなされたのと同じように**、私も供養しよう」と信解することが大切です。また、菩提心と慈悲をおこし、大乘仏教のことばや意味を暗記することも、無上なる供養の一つです。供養は、 Sanskrit では「プージャー」といい、「喜ぶ」という意味です。私たちが修行することで仏・菩薩はお喜び

になります。ですから、**修行も供養**なのです（第二章・22）

6.称賛のことばや奏楽などによる供養

仏と、仏の身・口・意の大海のごとき功德をもつ仏子たちを**称賛し、音楽を奏で、歌を歌い、供養**します。それらの供養が雲のようにいっばいに遍満していると考えて、供養します（第二章・23）。供養は物惜しみや執着の対治です。最初はささいな供養から始めても、次第に慣れて偉大なる供養ができるようになります。供養の「足跡」として、虚空の蔵のごとき財産を得ることができると経典に説かれています。

■礼拝について

自分の身・口・意で尊敬して礼拝します。身すなわちからだによる礼拝（五体投地）と、口すなわちことばの礼拝である称賛と、意すなわち心で尊敬することです。礼拝の対象は、三世の仏・法・僧、阿闍梨、貫主、修行者たちです。その方がたに対して、自分のからだは幻身のように無数の化身になったと観想して、礼拝するのです（第二章・24、25）。

礼拝によって、自分の功德が無数に増大します。礼拝は自慢の対治であり、仏の三十二相の一つである「**肉髻**」を成就する「足跡」となります。

※2.自分の持ちものでないものの供養について

参考資料『ダライ・ラマ 至高なる道』ダライ・ラマ 14世デンジン・ギャツォ著 谷口富士夫訳 春秋社 p41

私たちが現にもっているあらゆるもの、さらに、宇宙にある他のすべてのもの、誰かが所有しているもの、誰にも所属していないものを供養します。それから自分自身の体を供養します。五体満足であろうとなかろうと、真摯な気持ちで供養すべきです。これが肉体レベルで悪しき行いを避ける方法です。次に、芳ばしい沐浴場、天の羽衣、最高級の香料、香、賛歌などを供養します。

これらすべての供物は、量ではなく質が重要です。質というのは、素材と、それを供養する気持ちの両方が関係します。素材に関していえば、不誠実な方法で得られたものであってはいけません。私たちの気持ちに関していえば、損と得、苦と楽、称賛と批判、名誉と不名誉という八つの世俗的な関心によって損なわれてはいけません。

世界中のあらゆる美しい風景や、所有者のいないさまざまな小宇宙のような、誰にも所属していない供物は、それだけでは私たちと何の関係もないように思われるかもしれません。自分が所有していないものを心のなかで供養して、何の効果があるのか、と。

しかしアビダルマ（阿毘達磨）には「全世界はカルマの結果である」と説かれています。また『入中論』が説いています。

数限りない生命あるものと宇宙は

心によってつくられた。

すべての宇宙と生命あるものはカルマの結果である。

私たちが今住んでいる宇宙と、それについての私たちの共有の認識は、共通のカルマの結果です。同様に、来世に経験するであろう場所も、そこに住む他の生命あるものと共有したカルマの結果です。人間であろうとなかろうと、私たち一人ひとりの行為は、私たちの住む世界の一因となっています。私たち全員に、世界に対する共同責任があり、世界にあるすべてのものと関係しているのです。こういうわけで、私たちは世界を供養することができるのです。

※修行の供養について

参考資料『実践・チベット仏教入門』クンチョック・シタル ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 斎藤保高著 春秋社 p62

続いて、「行の供養」を行います。行の供養とは、上師と三宝の比類なき恩に対し、「教えのとおり」に正しく修行するという行為を捧げて報いることです。今ここでは、過去に自分が積集し、また未来に行じるであろう一切の善を、形あるもの 一例えば、美しい園など一として生起させ、瞑想の中でそれをことごとく供養するのです。この行の供養こそ、あらゆる供養の中でも最高のものであると、チベット仏教では考えています。供養の本来の意味は、喜びをもたらすことです。それゆえ、供養の対象たる上師と三宝が、本当に喜んで受けてくれるものこそ、最高の供養なのです。凡夫の五欲を満たすさまざまな供物を捧げることも、私たちの側にとって必要な修行ですから、上師や三宝は 一そういった供物を本来必要としていないにもかかわらず一喜んで受けてくれます。しかし、私たちが教えのとおりに一生懸命修行し、功徳を積んでゆく…。それ以上に上師と三宝が喜ぶことはありません。だから、行の供養こそが、供養の中でも最高のものなのです。

本文：無上の供養

[第二:]無上の供養は、

- 1)所縁の有る[・**有所得**の]供養と、
- 2)所縁の無い[・**無所得**の]供養です。

そのうち、第一[: 所縁の有る供養]は、菩提心を修習します。すなわち、「賢者は菩提心を修習したなら、勝者およびその子(菩薩)に対して供養する。これは最上です。」と説かれています。

[第二:]所縁の無い供養は、無我[・無自性空]の義を修習します。最上の供養です。そのようにまた『善住意天子問品』に、「正覚を欲する菩薩が、千万の劫、ガンジス河の砂ほど、花、香、同じく飲食を捧げて、最上士、仏陀を供養するのより、そこに**我**と**命者**と**人**が無いそのようなこれら諸法を聞いて、それに光明の忍を得た者一彼は、勝れた最上士を供養したのです。」と説かれています。『**大獅子吼経**』**訳註**36にもまた、「**想**と**相**を生じさせない者は、**如来**を供養したのです。取捨が無いし、無二に入る者は、如来を供養したのです。友よ、如来の身体は非事物の相なので、彼は事物の想いに住することにより、供養を受けたわけではないのです。」と説かれています。

[以上、]供養を捧げることを説明しおわりました。

Unsurpassable offerings can be made with an object or in a nonobjectified way. The first is the practice of bodhicitta. It is said:

When the learned scholar meditates on and practices bodhicitta, that is the precious, supreme offering to the Buddhas and bodhisattvas.

Non objectified offerings consist of meditating on the meaning of selflessness. This is the supreme offering. The *Son of the Gods, Sūsthitamati-Requested Sūtra* says:

A bodhisattva who desires enlightenment
Will make offerings of flowers and incense, likewise food and drink,
To the Buddha, supreme among humans,
For millions of kalpas—as many as there are sands of the Ganges.
But one who has heard and has patience with
The clear light of the Dharma of nonexistence
Of self, life, and person
Makes the supreme offering to the supreme human.

And from the *Lion's Great Sound Sutra*:

One who does not create thoughts of perception and conception makes offerings to the Thus-gone One without acceptance or rejection; entering into nonduality is an offering to the Thus-gone One. Friends, as the body of the Thus-gone One is of nonexistent nature, one does not make offerings by seeing him as existent.

This completes the explanation of making offerings.

所縁	認識主観である心の対象として精神作用をひき起こさせる客観。能縁に対していう。認識される対象(WikiDharma)
能縁	対象となるものを認識する主観
有所得	取捨選択して執着すること。物事に執着する心のあること。
無所得	何ものにもとらわれず、求めようとする心のないこと。執着しない自由な境地。また、主客の分別を超えた境地。
我	人間の自我の中に、中心となるものを認め、これが常住であり、唯一のものであり、主宰するものであると考えて、これを「我」と呼ぶ。self
命者	生命あるもの。我を実体的に捉えて、これにとらわれる見解の一つ。life
人	ひと、人間。個体の生命の主体。個体の主宰者。人我。人我の存在を認める見解。person
想	五蘊の一つ。外界の対象を感受した印象感覚に対して、その差別のすがたを取って知覚表象するはたらき。perception
相	内的な本質に対する外的なすがた。外見の形、ありさま。外に現れた状態。conception 仏教用語。特徴、特質、様相、形相という意味。(ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説)
如来	Tathāgata の訳。真如より現れて来た者の意。仏のこと。the Thus-gone One

※ 『大獅子吼経』 訳註 36 について

註 36) (前略) はてしない過去世に、「法」「善法」という二人の小欲知足の比丘がいて、仏舎利を供養、承事せず、仏塔へ参らなかつたので、数十万の天子たち、初業者の比丘たちにより非難された。二人は、どのようになれば如来を供養することになり、身心の無い如来が供養を得るのか訪ねた。比丘たちと天たちは、如来の戒・定・慧・解脱・解脱智見によってであると答えたので、それら五分法身こそが供養されるべきであるとして、さらにそれらは造作の相の無いものだと教えて、彼らに無生法忍を得させた、という話である。

戒・定・慧	仏道修行の三つの眼目。「戒」は、善を修め悪を防ぐこと、「定」は、心身の乱れを静めること、「慧」は、真理を証得すること。三学と総称する。
解脱智見	五分法身の第五。戒より定、定より慧、慧より解脱を得て、その解脱より得る尽智・無生智をいう。
尽智	阿羅漢の悟った智。四諦の理を悟り、煩惱が尽きたことによってえられた智慧。無生智。
五分法身	小乗の無学(阿羅漢)の位に達した聖者と仏が具える五種の功德をいう。戒・定・慧・解脱・解脱智見(解脱の知と見のはたらき)の五つ。
造作	諸条件が結ばれて、事物をつくりだすこと。また、つくられたもの。
無生法忍	三法忍の一つ。一切の事物・事象の無生無滅を悟ること。また、その悟りを得た心の安らぎをいう。

試訳：無上の供養

第二：無上の供養は、

- 1) 認識される対象のある（執着のある）供養と、
- 2) 認識される対象のない（執着のない）供養です。

そのうち、第一：認識される対象のある供養は、菩提心の修習です。すなわち、「賢者が菩提心を修習したなら、仏や菩薩に対して供養する。これは最上の供養です」と説かれています。

第二：認識される対象のない供養は、無我の意味を瞑想することにより成ります。これは最上の供養です。『善注意天子問品』に、「悟りを望む菩薩は、ガンジス川の砂と同じ数の数百万劫の間、人の中で最高の仏に対して、花や香、食べ物や飲み物を捧げます。しかし、我と命者と人は存在しないという法を聞いて、光明の忍を得た者は、最上の人に最上の供物を捧げます。」と説かれています。

『大獅子吼経』に、「想と相という考えを生じない者は、取捨なく如来を供養します。無二に入る者は如来に供養します。友よ、如来に身体は存在しないので、如来が実在しているとみなして供養するのではないのです」と説かれています。

以上供養を捧げることを説明しおわりました。

【供養のまとめ】

菩提心を修習する前段階の供養が、有上の供養。詳細に理解した上で実践することが大切。

菩提心を修習したならば、無上の供養となる。

無上の供養にも段階があり、菩提心を修習して仏や菩薩を対象として供養する段階からさらに進んで空性を理解したならば、仏や菩薩というような認識される供養の対象はなくなる。これが最上の供養である。

参考資料『実践・チベット仏教入門』クンチョック・シタル ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 斎藤保高著 春秋社 p63

これまで説いてきた供養の修行を実践するに際しては、「供養の対象（上師と三宝）・供養の主体（行者）・供養の材料（供物）の三者とも、顕現しているけれども空であり、空でありながらも顕現するという、幻のごときものである」と理解し、とくに「楽空無差別^{らくくむしやべつ}」を観じて供養を行うことが肝要です。

私たちがさまざまな供養や修行を行えば、上師や三宝は喜んでこれを受け、その心に清浄な無漏^{むろ}の歡喜^{かんぎ}（楽）を生じます。そのような無漏の楽こそは、究極的な真理たる空性と無差別のものです。こうした点をよく信解し、貪欲などの煩惱から離れ、清浄な覚りへ至るための修行として、供養を位置づけることが大切なのです。

註 52. 「楽空無差別」はチベット密教の究極的境地を表現するキーワードになっている。密教の修行という方便により得られる大楽と、究極の真理である空性を理解する智慧の両者が、一体化して無差別である境地。

顕教では、智慧と慈悲が重要であることを説くが、空性を理解するのはあくまで智慧であり、慈悲をもってはなしえないと考える。それに対して密教では、大慈悲を根本とする方便（密教の修行）を通じ、誰にでも生来具わっているはずの微細な楽一俱生楽一を純粋な形で体験し、それをもって空性を直接的に理解しようとする。そうであれば、俱生の大楽と空性を理解する智慧とは不二であり、智慧と慈悲の一体化—仏陀の覚りに等しい境地—が達成される。これを楽空無差別といい、無上瑜伽タントラ独自の理論である。

本文：罪を懺悔する

第二、罪を懺悔することを説明するなら、一般的に善悪すべては意の動機に掛かっています。意が主です。身・語は僕です。そのようにまた『宝鬘』に「諸法は意が先行するので、意は主だと知られています。」と説かれています。

よって、貪・瞋など煩惱を有する意により動機づけられてから、五つの無間罪むけんざい訳註38、またはそれに近い五つ、または十不善[を行ったこと]、または律儀と誓言せんまや（三昧耶）※を損なったことなど、自己がなしたものと、他者になさしめたものと、なすのに随喜したことは、罪・不善というのです。それだけでなく、貪・瞋と煩惱を有する意こころにより動機づけられて[・発起させられて]から、正法に対する聞・思・修の三つをしたこともまた、不善です。それらの果は苦が生起することです。

そのようにまた『宝鬘』に「貪欲・瞋恚・愚癡の三[毒]それにより生じさせられた業は、不善です。」「不善から苦すべて、同じくあらゆる悪趣が[生じます]。」と説かれています。『入行論』にもまた「不善から苦が生ずる。これからどのように解脱するというのでしょうか。昼夜すべてに私はこのことのみを思惟するのが道理です。」と説かれています。

よって、罪悪すべてを懺悔すべきです。懺悔により浄化されることは決まっているのかと思うなら、全く決まっています。『大涅槃経』[梵行品に]に「罪を造ってからもまた後で悔恨し、回復（還浄）するなら、濁りをもった水が澄水珠により澄む、または月が雲を離れて明るいと同じです。」、そして「よって罪を後悔し、隠さないで懺悔したなら、どのようなものも浄らかになる。」と説かれています。

b)Purifying Nonvirtues.Generally speaking,virtue and nonvirtue depend on entirely on one's mental motivation.The mind is the sovereign,and the body and speech are the servants.The *Precious Jewel Garland* says:

The mind precedes all dharmas,therefore the mind is called "sovereign."

Therefore,when the mind is ruled by the afflicting emotions of desire,aversion,and so forth,and the five heinous karmas or the five actions close to them or the ten nonvirtues are committed,vows and *samaya* are broken,and so forth;whether done by oneself,or by asking others to do it,or by rejoicing in others' deeds,this is called "nonvirtue."

Not only that,even if you hear the precious Dharma,contemplate and meditate on it,it is still nonvirtue if the mind is overrun by afflicting emotions of desire and aversion.The result of these is suffering.The *Precious Jewel Garland* says:

Desire,aversion,ignorance,

And the karma created thereby are nonvirtues.

All sufferings come from nonvirtue,

As do the lower realms.

Engaging in the Conduct of Bodhisattvas says:

"How can I be surely freed

From unwholesomeness,the source of misery?"

Continually day and night

Should I only consider this.

Therefore,one should declare and purify all one's nonvirtues.Is it definite that they can be purified by confession?

Yes,very much so.The *Sutra of the Great Parinirvana* says:

If one purifies evil deeds through remorse and repairs them,they are purified as muddy water is cleaned by the touch of the water jewel or as the moon shines after being freed from the clouds.

And:

Therefore,if you feel remorse for evil deeds and

Confess without hiding,any amount will be purified.

懺悔

過去に犯した罪悪を告白してゆるしを請うこと。

※意の動機について

参考資料『ラムリム伝授録Ⅰ』ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 藤田省吾著 チベット仏教普及協会 p305

現代では心で思うだけでは行為にならないと考えられるが、釈尊が説いた「心が主であり、心から言葉や行動のすべてが生まれる」との主張を受ければ、心の働きが業の形成にとってもっとも影響力をもつと考えねばならない。したがって、仏教一般では「業」には身体的活動（身業）・言語的活動（口業）・心的活動（意業）の三業があると考えられている。（後略）

五つの無間罪訳註38、誓言（三昧耶）※について

註38) 五無間罪は父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、和合僧を破る、悪心をもって如来の身から出血させる極悪の行為である。五近無間罪は無間罪に準ずる悪業であり、阿羅漢に邪淫を行う、見道の菩薩を殺す、有学の僧伽を殺す、僧伽の資具を奪う、仏塔を毀すという五つである。※の誓言（三昧耶）を損なうとは、密教が中心ではあるが、一般的には、円満であるべき師との関係を損なったことについても、よく言われる過失である。

参考資料『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ/西村香訳註 チベット仏教普及協会 p49

■懺悔について

私たちがどのような修行をしてもうまくいかず、進歩せず、行いが堕落したものとなるのは、自分の罪障のせいです。もし、それを望まないならば、懺悔すべきです。**懺悔すれば、五逆などの大罪さえも浄化できます。「偉大なる懺悔」によれば、罪を完全に浄化できます。**「中程度の懺悔」によっても罪はなくなり、「小さき懺悔」によっても罪の増大をふせげます。懺悔をしないなら、罪は毎日倍々に増えていき、小さな罪でも大きな苦しみとなります。もちろん罪には功德はありませんが、懺悔は罪の功德と言えるかもしれません。

本文：懺悔の仕方

懺悔の仕方は、どのように懺悔するのかというと、四種類の力を通じて懺悔します。そのようにまた『説四法経』に、「マイトレーヤよ、菩薩大士は四つの法をそなえたなら、造って積んだ罪悪を制圧することになる。四つは何かというと、すなわち、1)能破の現行[の力]と、2)対治の現行[の力]と、3)罪過の遮止の力と、4)依処の力です。」と説かれています。

How should one purify? Purify through the doors of the four types of power. Showing the Four Dharmas Sutra says:

Maitreya, when a bodhisattva mahasattva possesses the four powers, evil deeds and their accumulation will be defeated by them. What are they? They are:

- (1) the power of remorse,
- (2) the power of antidote,
- (3) the power of resolve, and
- (4) the power of reliance.

参考資料『精読シャーンティデーヴァ入菩薩行論』註 チベット仏教普及協会 p49

懺悔で罪を浄化するには、懺悔の方法である四つの力が必要です。四つの力とは、後悔の力、よりどころの力、対治の力、誓いの力です。

次の七支分の三番目にあたる懺悔の行をするときは、後悔の気持ちを持つことがとても重要です。後悔の気持ちがなければ、悪業を浄化することはできません。正しい浄化の行には、「後悔の力」「よりどころ（帰依の対象である三宝）の力」「（一切の悪行を正す）対治の力」「二度とその行為をしないという決心の力」の四つの力が必要となりますが、根源的な力である「後悔の力」があれば、他の力はそれにつづいて自然に生じます。

- | | | |
|-------------|-----------------------|-----------------------|
| 1)能破の現行[の力] | the power of remorse | 「後悔の力」 |
| 2)対治の現行[の力] | the power of antidote | 「（一切の悪行を正す）対治の力」 |
| 3)罪過の遮止の力 | the power of resolve | 「二度とその行為をしないという決心の力」 |
| 4)依処の力 | the power of reliance | 「よりどころ（帰依の対象である三宝）の力」 |